

コラム

2008/1 (6)

こんにちは。園長の佐藤です。今回は、3才を中心として現れる、「第1反抗期」について綴ります。最近『その子育ては科学的に間違っています』（國米欣明、2007）を読んで、認識を新たに致しました。

人間が集団で生活していく生き物である以上、お互いの関係、つまり「人間関係」は非常に大切です。幼稚園も究極的には社会性を身に付ける場、とさえ言えると思います。しかし人間にとっての社会性は、動物のように生まれながらにして備わっているものではありません。**親や周囲との「人間的」関わり方・生まれてからの学習によるものです。**有名なインドの「アマラ・カマラ」姉妹の話も、オオカミが育てたからではなくて、極端なネグレクト（育児放棄）の末に捨てられたからではないか、とも言われています。

つまり、子ども達は一瞬ごと、息をする毎に人間としての学びと成長を続けていくということです。それに関わることの重大さを、改めて感じます。

さて、「かかわり」の最もシンプルな分類は、「いいのよ」という受け入れ・肯定と「だめです」という拒否・否定でしょう。そして、その両方を受け取りながら、子ども達は人づきあいを学んでいきます。人間は基本的に、自らの全てを受け入れて欲しいと願っているものです。親であれば最終的には子どもの全てを受け入れる必要があるのですが、しかし同時に**「常に全てが受け入れられる訳でもないこと」も学ばせなければなりません。**その辺りが、特にいま難しくなってきた感じがします。

第1反抗期とは

いよいよ第1反抗期について触れましょう。これは、もう経験しているお母さん方も多いと思います。素直に何でも聞いていたはずの子が、急に「いや!」「どうして?」を連発するようになることで現れます。みなさんは、どう対処されていますか?

私も、3人の子ども達から「いや!」「どうして?」責めに合いました（現在進行中です）。その「質問」は時として、かなり「難しい」ことを聞いてきますね。「お花が綺麗だね」「どうして?」「今日はいいお天気ね」「どうして?」…最初は何とか答えていくのですが、それが「だって地球は丸いからさ」的なものになり、「そうなの!」まで至ったこともあります。一生懸命言葉を選んで、間違えないように、分かりやすく。でも。

案外「へえー」の一言で終わってしまうこともあります。

それに対して、妻がある所で聞いてきたのは「お日様がニコニコしているからね」。「エッ！それでいいの？」という感じでした。どうも子どもは、**やりとりそのものを楽しんでいる**ようです。時には「そうね、不思議ね」というだけで次の話題に移ったりします。どうやら大切なのは、**子どもからの投げかけに「適当に、適切に」答えること**のようです。

反抗しない？できない？必要がない？

しかし、この反抗期が現れないパターンが2つある、と國米氏は指摘します。片方は「親の態度が厳しすぎる場合」です。**何を言っても鋭く厳しい反応が返ってきてしまうのでは、子どもも気軽に話しかけられません。**確かに荒唐無稽なことも言うでしょう。難題をふっかけることもあるでしょう。真剣に答えようとするあまり事こまかに説明したり、逆に「いい加減にしてよ！」と切ってしまうことばかりが重なると、「いや！」「どうして？」は出てこなくなります。つまり封印されます。これは解消されたのではなく子どもの中に（答えて貰えない経験として）蓄積され、後に尾を引くことにも繋がります。

しかし、私が今回改めて気づかされたのは、もう一つの理由の方でした。

その時期、殆ど全ての欲求が満たされていると、**反抗する必要がない**という事です。そして指摘されていたのは、親の**必死の努力**です。「子どもに不快な思いをさせないために」「子どもとの人間関係にヒビをいれないために」叱らない。先回りして教えておく。過度ないつくしみ、過干渉の場合も、反抗期は現れないというのです。それではいわゆる「赤ちゃんの全能感」が強化されるだけ、と言えるでしょう。経済的にも余裕があり、少子時代の日本では、子どもの欲求を満たそうとすれば相当のレベルまで満たすことができるでしょう。もちろん相当の努力が求められます。「子どもが欲しがるように」「子どもが望むように」と。ただし**100%にはなりません。**一つ満たされると、必ずそれ以上を求めるのが「欲」というものだからです。むしろ昔から言われる「知足＝足るを知る」ことが大切なのではないかと思います。

その先に

この第1次反抗期は、せいぜい半年から1年間と言われています。これを超えると、会話への広がりがあります。期間中は繰り返しばかりと感じることもあるでしょうが、超えた先を楽しみに、「適当に・適切に」答えを積み重ねてゆくことに大きな意義があると思います。